

過程について

佐藤 裕

“Pancreas (オランダ語: Alveesch)”の訳語である「臍(すい)」という解剖用語は、文化二年(一八〇五)に宇田川玄真(一七六九—一八三四)がその著書『医範提綱』において創作した国字であることはよく知られている。同じ頃、『重訂解体新書』を刊行した大槻玄沢(一七五七—一八二七)も「臍(とん)」という字を造語していたが、既に中国には、“干し肉”を意味する「臍」という字があったこと、音韻的にも語感的にも「臍(すい)」のほうが「臍(とん)」にまさっていたことなどから、「臍」に定着していった。そこで今回、「臍」という国字を初めて載せた『医範提綱』以後に出版された腹腔内臓器の解剖を扱った数点の医学書を繙き、西洋の解剖学では“Pancreas”と呼称されていたながら、漢方医学の五臓六腑説ではその存在が

知られていなかった「臓器」が、「臍」という解剖用語に統一されて定着していった過程を調査検討したので報告する。

杉田玄白(一七三三—一八一七)と前野良沢(一七二三—一八〇三)らの『解体新書』では、臍に相当する訳語がなかったため、発音に漢字を当てはめていく方法で「大機里爾(大キリール)」としたが、弟子の大槻玄沢は玄白にその改訂を命じられて著した『重訂解体新書』において、“濾胞があつ(屯)まった”臓器と言う意味で、「臍」と造語した。一方宇田川玄真は、Pancreasを意味するオランダ語のアルフレース(alveesch)が“全てが肉質”という意味であることから、今日まで残る「臍」と日本製漢字(国字)を創作したのである。

寛政九年(一七九七)の木村秀茂による『府蔵考』にみられる内臓図は『解体約図』の引き写しで、「大機里爾」とされている(もつとも「臍」という新作漢字の登場は、文化二年西暦一八〇五年のことである)。

その後の推移をみると新宮涼庭(一七八七—一八五四)の『内蔵生象解剖学則』では、「臍」が採用されており、

その実体は「無数ノ濾胞ニテ形成ス」とある。

一方その外科手術が「師の華岡青洲を超えた」とも賞賛される本邦近世外科（別名瘍科）学の泰斗本間玄調（一八〇四—一八七〇）の著した『内科秘録』（元治元年から慶応三年に刊行）では、「朧」である。もつとも説明文では「朧、一名臍」と補足説明されている。

明治年間になると、すべて「臍」となっている。明治五年刊の『呉列伊氏解剖訓蒙図』では「臍」という字であり、明治九年のニールスミスの『解剖摘要』（第五巻消化器篇）でも、「臍」として掲げられており、「扁平脩長ナル腺ニテ……」と説明されている。

以上述べた如く、一八二六年に刊行を終了した『重訂解体新書』において「朧」という字が登場して以降に刊行された解剖学の成書で（無論全ての成書をあたってみた訳ではない）、「朧」という字が認められるのは『内科秘録』においてのみのようである。これから考えると、「臍」という国字は意外と早くから受け入れられ定着していったようである。

以上、文化二年に宇田川玄真の創作により解剖学の分

野に登場した「臍」という国字が、日本医学に定着していった歴史的な推移を概観した。あわせて、『解体新書』が参考とした西洋解剖学書（『解体新書』の凡例に挙げられた輸入解剖学書…トーマス・バルトリン、ヴェスリング、パルフェイン等の解剖学書）に現れた臍の解剖図を紹介してみた。なお、これらの解剖学書の多くが『解体新書』を中心とする解剖学書（婦女新聞社刊、昭和十八年）の著者である故岩熊哲氏が母校に寄贈し、現在九州大学医学部附属図書館に「杏仁館文庫」として残っていること、さらにこれらが久保記念館に残された医学書、故小川政修氏が蒐集していたヴェザリウスの『ファブリカ』やパレの『パレ全集』等とともに、九州大学が世界に誇れる貴重な文化遺産であることを付記しておきたい。

（福岡赤十字病院消化器外科）